

## 【正信偈についての簡単な解説】

浄土真宗開祖・親鸞聖人の名著「教行信証」行巻末に収められた偈文（讃歌）。真宗の要義大綱が七言百二十句の形式で簡潔に述べられている。前半の依教段では仏説無量寿経によつて南無阿弥陀仏のいわれを説き明かし、後半の依釈段では、インド中国日本で浄土の教えを正しく伝えた七高僧の業績が賛嘆される。なお左記の下段は、昭和二三年に制定された七五調の意訳勤行「しんじんのうた」（回向も）。



### ・帰敬序

帰命無量寿如来 ひかりといのちきわみなき  
南無不可思議光 阿弥陀ほとけを仰がなん

### ・阿弥陀仏のすくい

法蔵菩薩因位時 法蔵比丘のいにしえに  
在世自在王仏所 世自在王のみもとにて  
観見諸仏浄土因 諸仏浄土の因（もと）たずね  
国土人天之善悪 人天（ひと）のよしあしみそなわし  
建立無上殊勝願 すぐれし願を建てたまひ  
超発希有大弘誓 まれなる誓いをおこします  
五劫思惟之摂受 ながき思惟の時へてぞ  
重誓名声聞十方 この願選び取りませり  
普放無量無辺光 かさねてさらに誓うらく  
無碍無対光炎王 わが名よひろく聞こえかし

清浄歡喜智慧光 十二のひかり放ちては  
不断難思無称光 あまたの国を照らします  
超日月光照塵刹 生きとしいくるものすべて  
一切群生蒙光照 このみひかりのうちにある  
本願名号正定業 本願成就のそのみ名を  
至心信樂願為因 信ずるこころひとつにて  
成等覚証大涅槃 ほとけのさとひらくこと  
必至滅度願成就 願い成りたるしるしなり

### ・釈尊の勧め

如来所以興出世 教主世尊は弥陀仏の  
唯説弥陀本願海 誓い説かんと生（あ）れたもう  
五濁悪時群生海 にごりし世にしまどうもの  
応信如来如実言 おしえのまこと信ずべし  
能発一念喜愛心 信心ひとたびおこりなば  
不断煩惱得涅槃 煩惱（なやみ）断たで涅槃（すくい）あり  
凡聖逆謗齊回入 水のうしおとなるがごと  
如衆水入海一味 凡夫とひじり一味なり  
攝取心光常照護 攝取（すくい）の光あきらけく  
已能雖破無明闇 無明（うたがい）の闇晴れ去るも  
貪愛瞋憎之雲霧 まどいの雲は消えやらで  
常覆真実信心天 つねに信心（まこと）の天（そら）覆う  
譬如日光覆雲霧 よし日の雲に隠るとも  
雲霧之下明無闇 下に闇なきごとくなり



獲信見敬大慶喜 信心よろこびうやまえば  
即横超截五惡趣 まよいの道は截ちきられ  
一切善悪凡夫人 ほとけの誓い信ずれば  
聞信如来弘誓願 いたおろかるものとても  
仏言広大勝解者 すぐれし人とほめたまい  
是人名分陀利華 白蓮華のとぞたたえます

・疑いの戒め

弥陀仏本願念仏 南無阿弥陀仏のみおしえは  
邪見驕慢悪衆生 おごり・たかぶり・よこしまの  
信樂受持甚以難 はかろう身にて信ぜんに  
難中之難無過斯 難きなかにもなおかたし

印度西天之論家 七高僧はねんごろに  
中夏日域之高僧 釈迦のみこころあらわして  
顕大聖興世正意 弥陀の誓いを正機(めあて)をば  
明如来本誓応機 われらにありとあかします

・龍樹章(二世紀頃/南インド)

釈迦如来楞伽山 楞伽の山に釈迦説けり  
為衆告命南天竺 南天竺に比丘ありて  
龍樹大士出於世 よこしまくじき真実(まこと)のべ  
悉能摧破有無見 安樂国にうまれんと  
宣説大乘無上法 みことのまゝにあらわれし  
証歡喜地生安樂 龍樹大士はおしえます  
顕示難行陸路苦 陸路(くがじ)のあゆみ難けれど

信樂易行水道楽 船路の旅の易きかな  
憶念弥陀仏本願 弥陀の誓いに帰しぬれば  
自然即時入必定 不退のくらい自然なり  
唯能常称如来号 ただよくつねにみ名となえ  
応報大悲弘誓恩 ふかきめぐみにこたえかし

・天親章(五世紀頃/北天竺・ガンダーラ)

天親菩薩造論説 天親菩薩論を説き  
歸命無碍光如来 ほとけのひかり仰ぎつゝ  
依修多羅顯真実 おしえのまことあらわして  
光闡横超大誓願 弥陀の誓いをひらきます  
広由本願力回向 本願力のめぐみゆえ  
為度群生彰一心 ただ一心の救いかな  
歸入功德大宝海 ほとけのみ名に帰してこそ  
必獲入大会衆数 浄土の聖衆(ひと)のかずに入れ  
得至蓮華蔵世界 蓮華(はちす)の国にうまれては  
即証真如法性身 真如のさとひらきてぞ  
遊煩惱林現神通 生死の藪にかえりきて  
入生死園示応化 まよえる人を救うなり

・曇鸞章(四七六〜五四二年 中国・北魏)

本師曇鸞梁天子 曇鸞大師徳たかく  
常向鸞処菩薩礼 梁の天子にあがめらる  
三蔵流支授浄教 三蔵流支にみちびかれ  
梵焼仙経帰楽邦 仙経すてて弥陀に帰す  
天親菩薩論註解 天親の論釈しては

報土因果顕誓願 浄土にうまるる因も果も

往還回向由他力 往くも還るも他力ぞと

正定之因唯信心 ただ信心をすすめけり

惑染凡夫信心発 まどえる身にも信あらば

証知生死即涅槃 生死(まよい)のままに涅槃あり

必至無量光明土 ひかりの国にいたりては

諸有衆生皆普化 あまたの人を救うべし

・道綽章 (五六二〜六四五年／中国・隋)

道綽決聖道難証 道綽禪師あきらかに

唯明浄土可通入 聖道浄土の門(かど)わかち

万善自力貶勤修 自力の善をおとしめて

円満徳号勸専称 他力の行をすすめつゝ

三不三信誨慙 信と不信をねんごろに

像末法滅同悲引 末の世かけておしえます

一生造悪値弘誓 一生悪を造るとも

至安養界証妙果 弘誓に値(あ)いて救われる

・善導章 (六一三〜六八一年／中国・隋唐)

善導独明仏正意 善導大師ただひとり

矜哀定散与逆悪 釈迦の正意をあかしてぞ

光明名号顕因縁 自力の凡夫あわれみて

開入本願大智海 ひかりとみ名の因縁(いわれ)説く

行者正受金剛心 誓いの海に入りぬれば

慶喜一念相応後 信をよろこぶ身となりて

与韋提等獲三忍 韋提のごとく救われる

即証法性之常樂 やがてさとりの花ひらく

・源信章 (九四五〜一〇一七年／日本・平安)

源信広開一代教 源信和尚弥陀に帰し

偏帰安養勸一切 おしえかずあるそのなかに

専雑執心判浅深 眞実報土(まことのくに)にうまるるは

報化二土正弁立 深き信にぞよると説く

極重悪人唯称仏 罪の人々み名をよべ

我亦在彼摂取中 われもひかりのうちにある

煩惱障眼雖不見 まどいの眼には見えねども

大悲無倦常照我 ほとけはつねに照らします

・源空章 (一一三三〜一二二二年／日本・平安末期)

本師源空明仏教 源空上人智慧すぐれ

憐愍善悪凡夫人 おろかなるものあわれみて

眞宗教証興片州 浄土眞宗おこしては

選択本願弘悪世 本願念仏ひろめます

還来生死輪転家 まよいの家にかえらんは

決以疑情為所止 疑(うたご)う罪のあればなり

速入寂静無為楽 さとりの国にうまるるは

必以信心為能入 ただ信心にきわまりぬ

・結勸

弘經大士宗師等 七高僧はあわれみて

拯濟無辺極濁悪 われらをおしえすくいます

道俗時衆共同心 世のもろびとよみなともに

唯可信斯高僧説 このみさとしを信ずべし



## 【和讃について簡単な解説】

和語による七五調の唄で平安中期に流行。親鸞聖人は三百数十首の「三帖和讃」（浄土和讃、高僧和讃、正像末和讃）を詠み、仏徳を分かりやすく賛嘆されている。正信念仏偈とともに、第八世蓮如上人によって開版され、僧俗皆が日常勤行に用いるよう制定された。勤行は、正信偈に続けて念仏と六首を交互に読誦し、最後に回向で終わる。

（念仏）

彌陀成佛のこのかたは  
いまに十劫をへたまへり  
法身の光輪きはもなく  
世の盲冥をてらすなり

（念仏）

智慧の光明はかりなし  
有量の諸相ことごとく  
光暁かぶらぬものはなし  
眞實明に帰命せよ（念仏）

（念仏）

解脱の光輪きはもなし  
光触かぶるものはみな  
有無をはなるとのべたまふ  
平等覚に帰命せよ

（念仏）

光雲無碍如虚空

一切の有碍にさはりなし  
光沢かぶらぬものぞなき  
難思議を帰命せよ（念仏）

（念仏）

清浄光明ならびなし

遇斯光のゆゑなれば  
一切の業繋ものぞこりぬ  
畢竟依を帰命せよ

（念仏）

佛光照曜最第一

光炎王仏となづけたり  
三塗の黒闇ひらくなり  
大応供を帰命せよ

願以此功德

仏のみ名を 聞きひらき  
平等施一切

こよなき信を めぐまれて  
同発菩提心

よろこぶ心 身にうれば

往生安楽国

さとりかならず さだまらん

させる平等覚に帰命するがよい。

4 輝く雲のようにひろがる阿彌陀仏の光は、まるで大空のように、どのような煩惱にもさまたげられることがなく、その光のはたらきを受けないものはない。はかり知ることのできないはたらきをそなえた難思議に帰命するがよい。

5 阿彌陀仏の清らかな光に並ぶものはない。この光に出会うことにより、迷いの世界につなぎとめる悪い行いも、その力がすべて失われる究極のよりどころである畢竟依に帰命するがよい。

6 阿彌陀仏の光の輝きはもつともすぐれているから、光炎王仏と申しあげる。その光は、地獄や餓鬼や畜生という迷いの闇の世界を打ち破る。あらゆる供養を受けるにふさわしい大応供に帰命するがよい。

- 1 阿彌陀仏は仏となつてからすでに十劫の時を経ておられる。さとのり身から放たれる光はどこまでも果てしなく、迷いの闇にいるものを照らすのである。
- 2 阿彌陀仏の智慧の光明は限りがない。迷いの世界のもので、その光に照らされないものはない。眞實の智慧の光である眞實明に帰命するがよい。
- 3 阿彌陀仏のさとのりの光はどこまでも果てしなく照らす。その光のはたらきを受けるものは、みな有無の邪見を離れるといわれている。全てのとらわれを離れる。